

七曲峠花嫁道中とゆきとぴあ運動

菅原 弘助*1

1. 発端と主旨

昭和 51 年（1976 年）、26 歳の時私は 7 年間の東京生活に終止符を打ち、家業を継ぐために帰郷した。後ろ髪引かれる思いであったが、それ以上ダラダラと東京での生活を継続することは、親の年齢、体力、家業の状況から判断しても限界だと思い決断したのである。

帰郷後、茫然と暮らしている間にすぐ 2~3 年が経過した。

は何だろう、と。

実際、雪国秋田は全国的見地から観ても、経済的・社会的低迷は長期に渡って続いていた。例えば（今日でも）総務省の人口動態統計によれば、人口減少率は 10 年以上連続で全国第 1 位。老年人口の割合が高く、死亡者数が出生数を大きく上回り、他都道府県への転出数も多い。

更にごん死亡率、脳卒中死亡率、自殺率などが長期に渡って全国最高の状態である。



● 幻想的な雪灯籠（キャンドルロード）

私には、大きな悩みがあった。東京のど真ん中で暮らしていた生活とはまるで正反対の田代での暮らし、ここで本当に生涯、生きがいを持って、誇りを持って生活していけるだろうか。何の楽しみや、目標が持てるのか、といったことであった。更に追い討ちをかけるように、地元の人々が、こんな所には本当は住みたくない。雪の降らない所に住みたい。雪さえ降らなければ、と言っているのではないか。何ということだ。私は考え続けた。果たして「雪」が諸悪の根元であろうか。雪国秋田の低迷

また生産手段の「もの」の代表格である「土地」は国土交通省発表による 2005 年（平成 17 年）の地価公示価格の下落率は商業地で 1993 年（平成 5 年）から 13 年連続の下落。10.7%の下落率は全国最大である。地価が下がっても、その利用は無く、いたる所に空き地が目立つ。投資に値しないと敬遠されているのであろう。

かつて、秋田県は日本一であった非鉄金属鉱山、無尽蔵と称された天然秋田杉やブナの美林、その水源から滔々と流れ、枯れることを知らない水資源を背景にした稲作、他県人がうらやむ多彩で豊かな資源県であった。

その資源は今や見る影もなく衰退し「素材放出型産業」としてしか生きてこなかったツケが「秋田は元気が無い」という声に如実に現れているのである。つまり、「かつて他県もうらやむ天然資源に恵まれたが故の、長年に渡る油断、危機意識や創意工夫、競争力の欠落した県民性」の意識改革こそ、今急務と気が付いたのである。

* 1 「ゆきとぴあ七曲」実行委員長

私自身、「雪」は好きであった。幼少の頃より雪は「よき遊び相手」であり、スキーなどを含め、スポーツや勉強など生活そのものであった。

よし、地元の皆が嫌がる「雪」こそ自分のこれからの「最大のテーマ」であり、活用すべき目標だ、と心に決めたのであった。

振り返れば、26歳でUターンして壁に突き当たり、悩み続け、家業を継ぎ、JC運動などのボランティア活動を通じて、海外や全国各地を研修しながら、35歳の時着想し、実現したのが「ゆきとぴあ七曲」であり「花嫁道中」の雪祭りであった。東京には無いもの、他では真似のできない独自のものこそ、この羽後町がシンボルとすべきものと気付いたのである。

それは「雪の峠の花嫁さん」。

昭和39年（1964年）のオリンピックの年まで、七曲峠は冬期間通行止めであった。つまり、まだ車社会には程遠く、歩きや、馬そりの時代だったのである。今からは想像もつかない。実際、農閑期の冬には、婚礼も多かった。「田代に馬そりに乗って嫁に来た」母さんたちがたくさんいた。冬の厳しい難所「七曲峠」が、逆に冬の風物詩として脚光を浴びる舞台となったのである。

昭和61年（1986年）が第1回の開催で、帰郷から10年の歳月が流れていた。当時は、峠のスキーレースが本祭で花嫁道中は前夜祭だった。今回28回目（28年目）を迎える。以下、祭りのねらいと12kmに渡る道中案内を示したい。

2. 「ゆきとぴあ七曲」のねらい

羽後町は、積雪量2m（山間部）に及ぶ日本でも有数の豪雪地帯である。

そこから私達の先人は、雪国ならではの生活様式、数々の民族行事といった独自の生活文化を生み出してきた。

しかしながら、残念なことに、その雪を諸悪の根源視する風潮が強く、結果「雪国はダメだ、雪の降らない所に住みたい」という声を頻繁に耳にすることが多くなった。そこで私達は逆に、羽後町の中でも最も厳しい冬の象徴である「七曲峠」に着目し、そこを舞台として活用しながら、先人の生活様式を「祭り」として再現し、体



●花嫁を乗せた馬そり

験することによって、より雪と親しみ町の活性化を図ろうとした。

「ゆきとぴあ七曲」の名のごとく、「雪国こそ楽園にしたい」との祈りを込め、羽後町を日本の「雪国のシンボル」とすべく全国に名乗りをあげる次第である。

ゆきとぴあ七曲 道中案内

ゆきとぴあ七曲フォーラム

- ★期 日 1月28日（土）
- ★テーマ 「羽後の食・農・住まい」
- ★時間 午前9時30分～正午
- ★会場 活性化センター
- ★内容（敬称略）

基調講演 「雪国羽後の食と農」

秋田大学教育文化学部准教授 池本 敦

《パネルディスカッション》

パネラー 池本 敦

藤原 洋介

藤原 祐子

小野 雅敏

コーディネーター 菅原 弘助

◎かがり火広場雪まつり

ところ／かがり火広場（本町通り）

PM 1:00 新春開運福引きセール

PM 2:00 とん汁・あま酒無料サービス

PM 2:45 花嫁道中立ち寄り・紅白もちまき

PM 3:30 花嫁道中出発・みかんまき

協 賛／西馬音内商店会・本町上商店会・二万石商店会

◎禁・郷ノ目・南元西雪まつり

ところ／元西寺脇地内（禁郷ノ目児童館）

PM 1:00 児童館開放（PM 8:00 まで）

PM 3:00 あま酒・大福・みかん・御神酒無料サービス
開始

PM 4:00 花嫁道中立ち寄り

PM 4:30 花嫁道中出発

協 賛／禁・郷ノ目・南元西雪祭り実行委員会

◎七曲峠の茶屋（地球の真ん中）

花嫁花婿がローソクを形取った「ビックキャンドル」に点火するセレモニーが行われます。

PM 5:30 ビックキャンドルセレモニー

営業時間／PM 4:00～PM 9:00 頃まで

営業場所／ビックキャンドル前

協 賛／田代後継者会

◎ゆきとぴあ田代郷

ところ／旧長谷山邸

PM 3:00 出店開始 PM 7:30 閉店

PM 4:00 親睦カラオケ大会

PM 7:10 花嫁道中到着

PM 7:20 餅まき・みかんまき・冬花火・結婚式
良縁祈願祭

会場では、焼きそば・焼き鳥・たこ焼き・天ぷらそば・玉こん・お酒・ビール・ジュースなどを販売しています。

田代地区特売品コーナーもあります。

協 賛／田代商店会・JAこまち女性部田代支部、若竹部

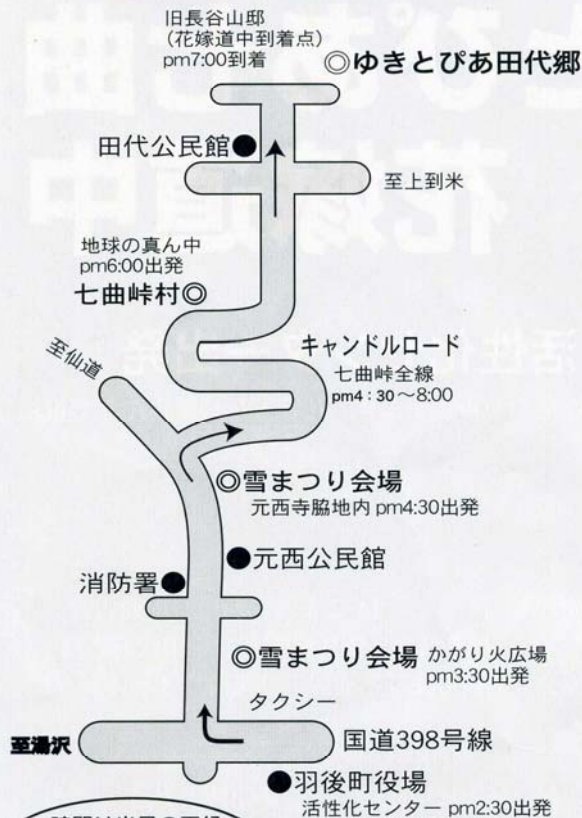
キャンドルロードウオーキング参加者募集

★申込期限／1月27日（金）まで（当日申込も可）

★申し込み／総合体育館（☎②1323）

★集合場所／活性化センター前 ★受付時間／午後2時～

花嫁道中経路



時間は当日の天候により、ずれる場合があります。

3. 課題と展望

「七曲峠花嫁道中」は、毎年1月の最終土曜日に開催される。実際、七曲峠越えをして、旧長谷山邸で結婚式を挙げる公募で選ばれたカップルを乗せた馬そりを中心に、みの、笠などを着けた昔ながらの行列が登場する。一行は町中心部から幾重にも折れた坂がある七曲峠を越え、豪農の館だった旧長谷山邸までの12kmの道程を約5時間かけて雪中を歩いて進む。峠は、雪灯ろうの回廊



●長谷山邸と冬花火

となり、幼想的で美しい世界が展開される。沿道で見送る人々や、県内外からのカメラマンや観光客を合わせて毎回1万人程が訪れる。よそでは真似のできない手づくりの、美しい祭りとして、県内外から根強い人気がある。

以上が主な内容であるが、毎年課題がある。

祭り当日は、各部門合わせると250人以上の人々が実行委員として活動している。窓口となる事務局は、羽後町役場企画商工課で、担当者が2名いるがその構成メンバーは、自営業、会社員、農協職員、郵便局員、役場職員、農協婦人部、中学生や各ボランティア団体から個人まで多岐に渡る。

開催行事は「花嫁道中」だけでなく、シンポジウムから商店会行事、雪祭り広場開催など「一大親雪・利雪運動」となっている。

メンバーの高齢化や人数の確保は常なる課題である。幸い、高瀬中学生の協力や小学生、子供達の参加もある。今後は、教育の一環としても、全町的な地元の小中学生の参加を図りたい。手づくりの小さな祭りとは言え、冬期観光の更なる発展のために、各部門や、新たな組み合わせなど創意工夫したい。28回目の今回、NHK番組「日本紀行」で「花嫁道中」が取り上げられることになった。当局の若手ディレクターが、七曲峠に行く「花嫁道中」

の映像を見て、その美しさに感動したのが直接のきっかけだったと聞いている。そういうことも、大きなヒントになる。

実際県外から観光できた人が、わたしたちと一緒に「峠」を歩き、その幻想的な美しさに感動して、「人と雪が織り成す、こんな素晴らしいお祭りがあったとは信じられない」と感嘆の声を上げた。そのような反響には、わたしたちも感動してしま

うが、スタッフみんなでしっかり受け止めて、さらによく研究し、長所を生かしたいと思う。

外に向かってゆく時、まず、何よりも内部充実が一番大切なことと考える。28年間、実行委員会体制でがんばってきたが、今後の末永い継続を考えたとき、核となる「花嫁道中」の保存会が必要になってきたと痛感する。今後さらに人口減少が進む中で老若男女が混在し、地域的広がりを持つ「保存会」を立ち上げたいと思っている。いずれにしても、1年1年をしっかりと積み重ね、本来の目標である「全国的な雪国のシンボル」となるべく、更なる活性化を図りたい。